

「新入社員の悩みゴト。」

細貝 女 先輩上司  
草野 男 新入社員

SE オフィス（電話の音など）

細貝（M）「6月。それはGWを抜け社会の厳しさにぶち当たる新入社員が疲れてくる時期。言うなれば、地獄の”6月病”である。先輩社員として、サポートしないわけにはいかない。」

草野 「うーん、どうしよう。どうすれば…」  
細貝 「草野くん、大丈夫？悩みあるなら相談乗るよ。」  
草野 「すみません…相談してもいいですか。」  
細貝 「あ、じゃあ飲み行こう！奢る！奢るからさ！」

SE 居酒屋

細貝（M）「居酒屋は平日の水曜にも関わらず、満席に近いほど賑わっている。正反対に草野くんは思いつめた顔。普段はカップ麺を啜りながら「幸せだー」なんて言ってる草野くんがこれほど疲弊してるとは。…ここは、盛り上げなくては。」

細貝 「じゃあ、乾杯しよっか！」  
草野 「はい…ああ、どうしよう。」  
細貝 「とりあえず生だよー！仕事終わりって感じがしてさ！」  
草野 「すみません…」  
細貝 「ええ、何で謝るの〜！」  
草野 「僕、ビール飲めないです…」  
細貝 「え、ああ。そっち。ごめんごめん、ほら好きな頼みな！」  
草野 「じゃあ…日本酒で。」

細貝（M）「ビールじゃないのに日本酒…いきなり！？と思いながらもこれ以上、負担をかけるわけにはいかない。しばらく何気ない会話をして、お酒が回ってきたところで…」

細貝 「悩み事、あるんでしょ？」

細貝（M）「そう切り出すと、一瞬顔が固まってから、おぼつかない口調で言葉を発した。」

草野 「はい…あの、実は…ぼく、その…（かなりためらって）」  
細貝 「あ一言いづらいよね。まあその気持ちわかるかなあ…」  
草野 「え？何で分かるんですか？」  
細貝 「わかるよ、そりゃあ。私だって同じように悩んだもの。」  
草野 「本当ですか!？」  
細貝 「え、そんなに驚くこと？新入社員は誰しも通る道だと…」  
草野 「そうなんですね！よかったあ…。じゃあ、どうしましょう。」

細貝（M）「きた。ここでどんな返しをするかが、今日の私の大仕事。会社で疲れた心を癒すとしたら…」

細貝 「えっと…例えば色んなところに旅行するとか。温泉入ったり！」  
草野 「あーそういうの多いって聞きますけど、あんま時間ないので…」

細貝 (M) 「そうか、確かに疲れているとそんな気力もないのかもしれない。なら…」

細貝 「高級レストランとかでディナーとか！大人な感じ出るよ！」  
草野 「あー、でもなんか高級レストランってマナーとか厳しいって言いません？」  
細貝 「厳しくはないだろうけど、多いかもね。」  
草野 「一緒に行って、いろいろ言われるのも嫌だなあって。」  
細貝 「え…？一緒に？」  
草野 「はい。え、あ。一緒にじゃないんですか？」

細貝 (M) 「…そうか。彼女と、って意味か。しまった。これは配慮ができない先輩だ。彼女としたいこと…それを考慮するなら…」

細貝 「じゃあ、遊園地はどうか？」  
草野 「先輩、冗談言うんですね…流石にきついですよ！」  
細貝 「ああ…会話持たないって言うもんね、ごめんごめん。映画とかかな？」  
草野 「…あの、先輩はちなみに、何したんですか？」  
細貝 「ああ…私は…その時そんな人、いなかったから。1人で読書に明け暮れてたかなあ…。」  
草野 「あ…なんか、すみません。先輩にこんな相談するなんて…」

細貝 (M) 「おっと、これは癩に障る。いくら想い人がいなくなつて、先輩としていい回答を…そうだ。」

細貝 「もし私なら、家で一緒にゆっくりするかな。それが一番でしょ」

細貝 (M) 「自信満々に答えると、草野くんは一瞬驚いたようだったが、」  
草野 「確かに、それが一番かもですね。お金とかじゃなくて、気持ちとかいうか。親孝行ってやつですか。」  
細貝 「え、親？彼女じゃなくて？」  
草野 「彼女??」  
細貝 「ちょっと、まった。草野くん、何悩んでるの？」  
草野 「え、初任給の親へのプレゼントですけど。」  
細貝 「仕事の悩みとかじゃなくて？」  
草野 「はい…もう初任給もらってから1ヶ月くらい経って今更なにを渡そうかなって。」  
細貝 「な、もおお…！それくらいすぐ決めなさいよ！」  
草野 「ええ…相談乗ってくれるんじゃないんですか。」  
細貝 「親なんて、何渡しても喜んでくれるわよ。私もそうだったし。」  
草野 「でも、先輩、親御さん亡くなったんじゃない…」  
細貝 「あああ！それは違くて…！すみませーん！ビールお代わり！！！」

終